
SWEET HOME

淡雪ぼたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SWEET HOME

【Nコード】

N5944T

【作者名】

淡雪ぼたん

【あらすじ】

《異色サスペンスラブ》失ってしまった9歳の時のあの事故の記憶……。私の主人の恋人は、あの事故で亡くなってしまった……。亡くなった父は事故の加害者？私は加害者の娘？全ては閉じこめられた、あの日の記憶の中に……。《携帯創作小説サイト フォレストからこちらに引越しました。》

第1話 甘くない新婚生活（前書き）

事故のシーンの回想などで、グロテスクな表現や血の要素の含む表現が文中含まれます。苦手な方は十分ご注意ください。

第1話 甘くない新婚生活

『格差婚』と言う言葉があるが、私の結婚は、まさにその通りの結婚だと思っただ．．．。

* * * * *

私の名前は谷原美月たにはら みづき 21歳。

私には家族がない．．．。

9歳の時に交通事故で亡くなってしまった。

車同士の追突事故．．．。

休日の日、父の運転する車で家族でドライブ．．．何でも無い緩いカーブの片側1車線の海沿いの道路を走っていて、対向車線から走って来た車と正面衝突．．．。

なんでそんな事になったのか？

この事故の原因は、父のハンドル操作ミスとか世間では騒がれた。

追突した相手の車を運転していたのは、『一条美和いちじょう みわ 21歳』彼女は不幸中の幸いで軽傷で済んだ。

助手席に乗っていた女性は、人気上昇中のモデル兼タレント『如月ごとろ 21歳』

美和と栞は、高校時代からの親友同士であり、また、美和は栞のマネージャーだった。

栞は、OL向けファッション雑誌から大ブレイクして、カリスマ的存在となり、CMやバラエティー番組や、ドラマにも出始めて、人気があがり始めた矢先の事故だった。

事故の衝撃はすさまじく、天使のように清らかで愛らしく美しいその姿は、無残な状況だったようで、グチャグチャに潰れた車と飛び散った血が大きく雑誌に掲載されたり、テレビで放映されて、人々を震撼させ、彼女の死を惜しむファンやマスコミに、亡くなった父は、批判と中傷を受け、極悪人のようにイメージ付けられた。飲酒していたとか、薬を飲んでいたとか、事実無根の記事を色々と書かれた。

家族思いで慎重で、穏やかな性格の父がハンドル操作ミスを起こすなんて信じられなくて、今でも私は信じてない。父は素晴らしい人だったと記憶している。はつきり言い切れ無いのは、あの車に乗っていたのにも関わらず全く覚えてないからだ。

ぶつかった反動で、私の乗っていた車は反対車線側にはじき飛ばされて、ガードレールを突き破って、海に転落した。

私はその時の記憶が一切ないのだ。

だから海に落ちてどうして助かったのか？ 全く分からない．．．。何故私一人だけ助かったのだろうか？

父も母も2つ年上の姉も．．．あの事故で帰らぬ人となった．．．。私は父方の祖父母に引きとられ、育てられた。

父は祖母が高齢出産の年にさしかかった頃に生まれた子だったので、祖父母は私が引き取られた頃には70歳を過ぎた年齢だった。

ささやかな年金暮らしの祖父母．．．。裕福とは決して言えない暮らしだったが、愛情込めて大切に育ててくれた。

祖父が18歳の時に亡くなり、祖母もつい数カ月前に亡くなってしまって独りぼっちになってしまった。

一人はとても寂しかった．．．。

友人や、知人では埋められない、心の淋しさがある．．．
とても家族が欲しかった．．．。
温かい家庭を持つ事が私のささやかな夢．．．。

高校を卒業して、私は家事代行サービス会社に就職。
そこで、今の夫と出会った。

彼の名前は、佐倉崎翔さくらのあき35歳。

大手 貿易会社の社長で、横浜山の手の高級住宅地の中にある彼の屋敷に派遣されて、数カ月後にはプロポーズされて、即入籍、スピード結婚となった。

彼とはあまりにも収入や学歴．．．何から何まで世界が違いすぎていた。

それに、十人並みの容姿と体形に、それなりの学歴に貧しい育ちの私とは違って、背も高く足も長くモデル級のプロポーションに、美しく整った容姿で、妻になりたいと思う女性は星の数ほども居そう
な彼．．．。

はつきり言つて、女性には困らないだろうと思える彼が、何故私との結婚を望んだのだろうとちょっと不思議だった。

だけど．．．。

こんな素敵な、おとぎの国の王子様の様な人に望まれたら、迷うはずが無い．．．。

例え一瞬でもいいから妻になりたい．．．。
なにより寄り添って支えてくれる人が欲しい．．．家族が欲しい．．．
．一人は寂しい．．．。

翔さんは、いつも笑わないで、冷静で、感情を表に出さないような人だった。

心は何処か遠い場所にあるような、目があっても自分をすり抜けて、何処か遠くを見つめているような感じがした。心の中に思っている人が居るのだろうか？

初めは恐そうな、取っつきにくそうな人だなと思ったが、身の回りと食事の世話をしている内に、不器用な中にさりげなく優しさのある人だと感じた。

一生懸命尽くせば、ポソツと「ありがとう」とか「美味しいね」とか、「綺麗にしてくれたね」とか、感謝の言葉をかけてくれて、それが私の励みになり幸せな気分にならせてくれて、生きる希望のような糧のような気持ちになった。

ハデハデしい結婚式は苦手との事で、近くにある歴史あるゴシック調の教会で、二人だけの結婚式を挙げた。

そして一緒に役所に婚姻届けを出し、夫婦となった。

翔さんとの穏やかな時間・・・。

独りぼつちだった私に出来た、家族・・・愛する旦那様・・・。

やっとかなった私の夢・・・希望・・・幸せ・・・。

ずっとこれから永遠に続いていくだろうと思った。

結婚して初めて迎える夜も優しかった・・・。

優しく深く甘い接吻と思いやりに溢れた愛撫・・・。

初めて男性を受け入れる甘い傷みと、体中駆け巡る初めて体験する、大きな快樂と喜び・・・。

甘い時間の後に抱き合って、これからの夢を語りあった。

「はじめてだったんだね。大丈夫？ 傷まないかい？」

「うっん、大丈夫．．．私幸せです。独りぼっちだった私に家族が
出来て．．．早く子供が欲しいです」

「そうだね」

「でも、なんで私を妻に？」

「いつも一生懸命で素朴で家庭的な君に惚れたのかも．．．。
僕の回りには、派手で、虚栄心の高い、外面ばかりに目が行く女性
が多くてね．．．。」

美月のような子と出会ったのは初めてだったし．．．」

「私と同世代ぐらいの女の子は、オシャレに夢中になってるのに、
私は、地味で、ぬかみそ臭い女だって、男性から敬遠されてばかり
で、それなのに、翔さんのような女性が放っておかないようなこん
な素敵な人に望まれて．．．今でも夢じゃないかしらって、明日に
なったら夢が覚めないかしら？ 魔法が解けないかしら？ってちょ
っと恐くなります」

「これは夢でも魔法でもないから安心してよ」

「はい。明日、亡くなった家族にお花を供えに行ってもいいです
か？」

「お墓参りかい？ 僕も一緒にいこう．．．」

「嬉しいです。実はお墓以外に、ずっと避けてきたけど、行きたい
場所があるんです」

「どこなんだろう．．．気になるな．．．」

翔さんと両親と姉の眠るお墓にお参りした後に、行きたい場所の話をした。

「家族が車の事故でなくなった事はお話しましたよね？」

実は、あの事故現場にお花を供えたいと思って．．．。私、事故の記憶の部分だけ失ってしまったって覚えてなくて．．．もしかしたら心の奥底に、あまりにも恐ろしい記憶だから思い出したくないと思う気持ちがあつて、あの日の記憶がないのかもしれない。家族が出来てもう独りぼっちじゃないし、勇気が湧いて来たというか．．．。気持ちの区切りもつけたくて．．．。」

「分かった。で、場所は？」

* * * * *

翔さんと一緒に12年ぶりに来た、あの事故現場．．．。

湘南の美しい海が一望出来る海岸沿いの道路．．．。

見晴らしのいい緩いカーブで、片側一車線と、そんなに大きい道路ではないけれど、道幅もまあまあ幅がある．．．。

なんでこんな場所で事故になったのだろうか？ 原因が分からない。

．．．。

あの現場に近付いていくにつれ、ちょっと軽い頭痛が始めたけれど、翔さんが側にいるから大丈夫．．．。

自分にそう言い聞かせて、ゆっくりと近付いた。

ぶつかった衝撃ではじき飛ばされて、ガードレールを突き破って海に転落した、あのガードレールの前には小さなお地藏さんが置かれていた。

とつても可愛らしい慈愛に満ちた表情・・・そのお地蔵さんにはまだ新しそうな花が手向けられていた。

「こんな所にお地蔵さんが・・・お花まで・・・」

ふと翔さんの顔を見たら、青ざめていた。

それがどうしてなのかは分からなかった・・・。

「翔さん？」

「美月・・・君のお父さんって、谷原 信治って言うのかい？」

「どうしてそれを・・・?! 何故そんな事を聞くの？」

翔さんの腕に触れようとした時だった・・・。

「触るな!!!」

「えっ?」

「美月・・・君は、谷原信治の娘だったのか・・・。こんなこと・・・こんな偶然ありえない・・・」

「どう言う事?」

「お前の父親は、僕の大切な恋人を奪った男だ。」

「それって・・・亡くなったモデルの・・・。」

「如月菜・・・僕が愛した唯一の女性だ」

「そんな・・・」

やっと見つけた私の大切な家族・・・。

幸せは脆くも崩れ去った。

愛されて結婚したと思っていたのに、翔さんが栞さんの事を、『愛した唯一の女性』と言った事もショックだった。

・・・私は翔さんにとって、憎い仇の娘？！

でも、お父さんはそんな人じゃない・・・悪い事はしてない。

「お前は、その事を知っていて俺に近付いたのか？ わざと僕をこの場所に連れて来たのか？」

「知りません。栞さんがあなたの恋人だった事も、何もかも知りませんでした」

私は何を言っても聞いてくれず、冷ややかな凍ってしまいそうな、冷たい目で睨みつけられた。

・・・もうこの結婚は続けられない・・・。

家に戻ってきてから翔さんに、結婚解消の気持ちを伝えた。

「何を言っても信じてもらえないかも知れませんが、本当に私はあなたが栞さんの恋人だったと言う事は知りませんでした。

でも、あなたにとって私が仇の娘だと言うのなら、そして私と一緒にいる事に苦痛を感じ、一緒に住めないと言うのなら、私はあなたと離婚してここを出ていこうと思います」

「離婚は許さない!!」

「えっ?」

「あの時何が起こったのか、どんな手を使ってでもお前には思い出してもらう・・・そして、お前の父親の代わりに一生お前には罪を償ってもらおう・・・。手元に置いてな・・・」

父が罪を犯したなんて今でも信じられないし、私は信じない・・・。だけど・・・。だけど・・・。あなたが償えと言うならば、私はあなたの側に居て、心の傷が癒えるように償おうと思います。あなたの凍りついた心が解けるように・・・。

「わかりました。あなたの言う通りにします」

(第2話に続く)

第2話 闇の記憶

あれから翔さんは別室の寝室で寝るようになり、夫婦生活は初めての日の夜を最後に無くなり、ひとつ屋根の下に住んでいて、法律上は夫婦となっているけれど、赤の他人のようになってしまった。

そしてあの事故現場にも何度も連れて行かれ、催眠療法も受けさせられ、時には薬物や針療法、電気ショック療法など、様々な方法を試された……。

時々靄にかかった中でうつすらと何かが見えそうになるときがあるけれど、思い出そうとすると頭が割れそうに痛くなり、呼吸が乱れ、心臓が止まりそうに苦しくなり、それを邪魔してしまう……。

夜、悪夢にうなされ何度も飛び起きるようになった。

様々な治療の副作用なのか？ 食欲は無くなり、気力も体力も落ちてきて、体が地球の重力に押しつぶされそうなくらい重く感じ、とてもだるくて体を動かすのが辛いような状態になった。

鏡に写した自分の顔を見て、ギョツとした。

目の下にはクマが出来、肌も張りが無くなり、凄く老けたように見えた。

「これが私？」

あんなに家族が欲しいと願っていたけれど、今はとても辛い。

翔さんと顔を合わせると、心臓が凍ってしまいそんな苦しさを感じる。

会話らしい会話も無く、翔さんは家で食事を摂らなくなり、やがて、

あまり家に寄りつかなくなってきた。

そんなに嫌っているのなら、離婚して欲しい．．．。でも、それでは．．．私を解放したら、復讐を果たせないのね。父の変わりに、私が傷み苦しむ姿を見せる事により、あなたの心が軽くなり、償いになるのでしょうか？

* * * * *

ある日、とうとう起き上がれなくなってしまった。40度近い高熱を出し、意識も朦朧とし、ベッドの中でうなっていた。

翔さんは2日ほど家に帰ってこない．．．。

このまま死んでしまうのかな？ ふとそんな事が頭の中に浮かんだ。それもいいかもしれないとも思った。

仇の娘が死んだら、少しはあなたの心の傷が癒えますか？心が晴れますか？ほんの少しは悲しんでくれますか？

朦朧とした状態で、ぼんやりと部屋の扉を見つめていた。

幻覚まで見えて来たのだろうか？

その扉がゆっくり開いて『美月』と、翔さんが私の名前を呼んだようにうな気がした。

名前を呼ばれるなんて．．．何週間ぶり？ いえ1月以上ぶり？

私の名前を呼ぶなんて．．．そんな事ある訳ないわね。

第一、家に戻って来るはずが無いじゃない．．．。

ましてやこんな平日の昼間に．．．。

それに、いつも目を背けるか、冷やかな嫌なものを見る目を向けられて．．．なのに、この幻覚は、とても驚いたような心配そうな

顔で私の顔を真直ぐ見て、覗き込んでいるし．．．私の名前を呼びながら、額に優しく手をおいてくれて．．．ひんやりしてとても心地良い気持ちだった．．．。

これは私の願望が見せた幻覚．．．夢なんだわ．．．。こんな幻覚を見てしまうなんて、私、死んじゃうのかな？

久し振りに見た、優しい翔さんの夢．．．。

もっと見ていたいと思ったけれど、目の前がだんだん暗くなってきて、夢の続きは見れなくなってしまった。

もっと、翔さんの夢を見ていたかった．．．。

でも、最後にこんな夢が見れたから、もういいかな．．．。

目の前は真つ暗になって何も見えなくなってしまったけれど．．．声だけは、夢の続きなのか？ しばらく聞こえた．．．。

何度も、何度も 『美月．．．美月』 って呼んでもらえた。

だから、返事をしたくて、一生懸命声を出そうと口を動かしているのに、肝心の声が出ない。

せつかく呼んでもらえたから、答えたかったのに．．．。

* * * * *

それからずっと真つ暗闇の中に私はポツンといた．．．。

もし死んでしまったのなら、お父さん、お母さん、お姉ちゃんが迎えにきてくれるはず．．．。

もう独りぼっちじゃなくなるんだね。

死ぬの恐くないよ．．．もうすぐ会いたかった家族に会えるから．．．。

早く会いたいな．．．私．．．幸せだよ．．．もうすぐ皆に会える

から．．．。

ゆっくりゆっくりと意識が戻って来たら、規則正しい電子音のような音が聞えて来た。

この音は？ 私の心臓の音のリズム？

ゴボゴボ．．．プシュー プシューと人工呼吸器の音も聞えて来て．．．
．．．だんだん回りの様子と、今の自分の状況が分かって来た。

今私は、病院のベッドの上に横たわっている状態で、腕には点滴、胸には心電図、口には人工呼吸器の管が付けられている。

誰かが手を握っているような感触があった．．．。

「うそつ．．．」と思った。

私の事を憎んで嫌っているはずの翔さんが、手を優しく握って、椅子に座った状態で、ベッドに頭を乗せて眠っていた。
ずっと手を握っていてくれたの？

心配してくれたの？

その握っている手がピクツと動いて、頭が持ち上がってゆっくりこつちを見て目があった。

「気がついたのか？」

「か．．．ける．．．さ．．．ん」

声は出なかつたけれど、口をパクつかせて名前を呼んでみた。

「無理しなくて喋らなくていいから、ゆっくり休んで。

重症の肺炎を起こして、3日間意識不明の重体だったんだ．．．。
僕が悪かった．．．君を放っておいて、追いつめて、苦しめて．．．。

12年前に亡くなった栞を忘れようと、君と結婚したが、君を失いそうになって、改めて自分の気持ちがよく分かったよ。美月の事を大切な人だと思ってる。愛している・・・」

思いも寄らない感激の言葉に、目から大粒の涙が溢れた。

それを見て、翔がハンドタオルで顔を拭いてくれながら、心配顔で言った。

「大丈夫か？ 苦しいのか？」

「う・・・れ・・・しい」

口をパクつかせて答えた。

「分かったから・・・もう喋らないで、休んで・・・」

困ったような、照れたような翔の顔を見て、美月はこんな顔は初めて見たかも知れないと思った。

雲間から漏れる陽の光の様に、希望の光が差し込み、美月はその後はメキメキと元氣を取り戻した。

そして2週間後に退院して、久しぶりに山の手の屋敷に戻って来た。

山の手の屋敷は、適度に広い高級邸宅と言う佇まいで、今までは週1 2度ほどハウスクリーニングと、週1で庭の手入れを頼むぐらいで、家の事は美月が一人でやってきた。

だが、美月の体の事を考えて、あれから通いの家政婦を2名やっ

た。
「暫くは家の事は家政婦さんに任せてゆっくり休養すると良いよ。なんならこのままずっと家政婦さんに任せても良いし・・・」

「私の為に、ごめんなさい」

「いや．．．元々結婚したら1人か2人、雇おうとは思っていたんだ．．．」

本当に可哀想な事をしてしまつて悪かつたね」

「私の方こそ．．．このままここにいても良いのですか？ 私は．．．あの事故の．．．」

「嫌じゃなかつたら、このままここにいて欲しい．．．。冷静になつて考えて見れば、あの時美月はまだ9歳の子供だったんだよね。」

きつととても恐ろしい体験をしたんだと思う．．．だから、その時の記憶は消し去りたくて、思い出せ無いんだろうと思う。それなのに、辛い治療までさせて無理矢理思い出させようとして．．．本当にすまなかつた。

重症の肺炎にまでなつてしまったのは、全て僕のせいだ」

「そんな事ありません。私の健康管理が悪かつただけですから．．．」

「今の僕には、君が一番大切な人なんだ．．．。失いそうになつてその大切さが良く分かつたよ。だから、ずっと側にいて欲しい．．．」

「私．．．嬉しいです。 ひとりぼっちになつてから、ずっと．．．ずっと．．．家族が欲しかつたんです。」

寂しがり屋の私の心を支えてくれる、寄り掛かれる人が．．．。私の事を愛してくれて、私が愛情を捧げられる人が．．．。

『ただいま』って帰ってきてくれて『おかえりって』言つてあげら

れる人が、反対に言ってくれる人が・・・。
そんな人とずっと時間を共に過ごして、温かい家をコツコツと作り
たいなつて・・・。
ささやかだけど、私の夢なんです」

「あの事故の事は忘れて、これからずっと一緒に生きて行こう・・・。
。温かい家を作ろう・・・。」

「翔さん・・・。」

「美月・・・。」

ふんわりと抱きしめられて、幸せだって思った。

新婚初夜の翌日の、あの事故現場の後からずっと・・・ずっと・・・。
孤独で淋しかった。

目もあわせて貰えず、触れてもくれず・・・名前も呼んでもらえな
くて・・・。

またこんな時間が戻ってくるとは思えなかった・・・。
心が感激でうち震えて、目から一筋の涙がこぼれた・・・。

それを見て、翔が驚いた。

「悲しいの？」

「ううん・・・とても淋しくて辛かったから、嬉しくて、感激して
ます」

「じめんな」

「ううん・・・謝らないで・・・私、今、幸せですから」

それから翔は優しい眼差しで美月を見て、唇でそつと涙をぬぐった。それから頬に優しくキスして、それから唇に深いキスを落とした。翔の口づけに、体中の血がザワザワと波打ち、炭酸水のように体中に心地良さがシュワツと広がった……。

名残惜しそうにしつつも、不意に翔が唇を離した。

「これ以上はブレーキが効かなくなりそうだから……」

そう言つて、翔は美月を抱き上げるとベッドにそつと寝かせた。

「良い子は大人しく寝てないと……」

翔もベッドに上がると、優しくふんわり抱きしめた。

「ごうやつて、抱きしめててあげるから、休んで……」

「はい……」

安堵感から、美月はいつの間にか眠ってしまった……。

退院して体が疲れたからなのだろうか？ ちよつと微熱が出てきたようで、変な夢を見た……。

あの事故現場……海岸側と反対側にちよつとした広場があつて、そこに自働販売機が3台並んでいる。

9歳の美月は赤い色の自働販売機にお金を入れて、ペットボトルのジュースを買った。

ボタンを押してガシャンと取り出し口に落ちるジュースの音……。

道路に転がるチャランチャランというお金の音……。

そして……キキキーツと言う車のブレーキ音が響き渡った……。

。

その途端、もの凄い恐怖心が襲ってきた。
恐ろしすぎて気が狂いそうだった・・・。
恐くて恐くて、体をばたつかせながら悲鳴を上げた。

(第3話に続く)

第3話 恐い写真

「美月！！」

悲鳴を上げながら手足をばたつかせて、もがいていた美月を、翔がギョツと抱きしめて一生懸命宥め、落ち着かせようとした。

ハッ！と目覚めたら、とても心配そうな顔で覗き込んでいる翔と目があった。

「いったいどうしたんだ？ 恐い夢でも見たのか？」

「私・・・あの事故現場のすぐ傍の自働販売機の前に立ってました」

「えっ？」

「私・・・あの事故の車には乗ってなくて、自働販売機の前でジュースを買ってました。道路にお金が散らばって、ブレーキの音がして・・・凄く恐かった・・・」

「いいんだよ。無理に思い出さなくて・・・」

翔は後悔した。

固く閉じて封印されていた美月の禁断の小箱を、無理矢理こじ開けようとして、きつと少し隙間が開いてしまっているんだ・・・。

この小箱が開いてしまったら、美月がどうなってしまうか？

これ以上小箱が開かないように、封印させないといけないんだ・・・。

「僕のせいだ．．．僕のせいで君は苦しんでいる．．．過去の事は忘れるようにしよう。そして一緒に、前を見て歩こう．．．」

「翔さん」

「美月の苦しみがとれるように、支えるから．．．ずっと．．．辛い時は何でも僕に話すんだよ」

優しく抱きしめられ、ふわりと頭を撫でられて、美月はまた気持ちを落ち着かせ、眠りに誘われて目を閉じた。

あれから毎晩、悪夢にうなされ続けた。

何か重要な記憶が思い起こされそうな気持ちになるのだが、それを見るのが怖い．．．。

気持ちのスッキリしない感じだけれど、もうこれ以上は無理に思い出そうとしない方が良いのかもしれない。

．．．だって、もう父も母も姉も．．．栞さんも、もう戻ってこないのだから．．．。

* * * * *

ある日美月は、クリーニング店の配達員が持って来た、翔のヨンヤツをウォークインクローゼットに仕舞っている時に、何やら視線のようなものを感じた。

その視線を感じる方を見たら、大きな額に入った写真だった。

ウォークインクローゼットの端の方に何枚か立てかけてあって、アルバムやら、まだ整理出来てない写真類が束で袋に入っているものもあった。

初めて見る人のはずなのだけど、なんだか見覚えがある様な気持ちにもなった。

何処かであった気がする．．．何処だろう．．．。

写真やアルバムを出して来て、ローテーブルの上に置いて一つ一つ見た。

「もしかして、この人が栞さんなの？」

あの日の記憶は何も覚えてないし、祖父母も気を配って、その頃のニュース番組や記事などは、一切美月の目に触れないように気を配ってくれたので、栞さんの顔も、運転していたマネージャーの顔も知らない。

もの凄く華麗で美しく清らかそうな人だった．．．。
人並の容姿の自分では足元にも及ばないような、神々しい美しさだ．．．。

栞さんの写真を見てみると、彼女の代わりのように、今、翔さんの妻として側にいる自分が恥ずかしいような気もして来た。

栞さんと比較したら、私はもの凄く見劣りしてしまうだろう．．．。
それに、亡くなった人は永遠に年をとらないし、美しいまま翔さんの記憶の中に住み続ける事が出来るのだ．．．。

ちよっぴり淋しいような、悲しい気持ちにもなってきた。

でも．．．どうして栞さんの顔を私は知ってるの？

写真を暫く見ていたら、真直ぐにこちを見る栞さんの目に何やら恐怖心を感じてきた。

『怖い．．．』

なんでこんなに恐ろしく感じるのだろうか．．．。

その理由を思い出したくない、思い出しはいけないような気がしてくる．．．。

冷や水をかけられたように背中はずクズクしてきて、だんだん吐き気も感じてきた．．．。

写真を慌てて掻き集めて、ウォークインクローゼットの中に仕舞い、慌てて扉を閉めた。

今閉めたクローゼットの扉に触れているのも恐くなってきた。

あの写真があると思うと、この部屋の中にいる事も怖い．．．。

恐怖心が大きくなればなるほど、あの日の光景が思い起こされそうな気持ちになって来る。

『キキキーツ』と言うブレーキ音と、『チャリンチャリン』と転がる小銭の音．．．それから『ガシャーン』と車同士がぶつかる音が突然頭の中で鳴り響いた。

耳を塞いでその場にしゃがみ込んで、暫くジツとしていた。

「奥様どうされましたか？」

掃除をしに部屋に入って来た家政婦が、うずくまっている美月の姿を見て、驚いて駆け寄った。

「吉田さん．．．大丈夫．．．ちょっと気分が悪くなって．．．こ

うやって休んでいたら、治るから．．．」

「奥様、お部屋で休まれた方が宜しいのでは？」

「いいえ．．．もう大丈夫．．．私、ちょっと外の空気を吸いに出かけて来ます」

「大丈夫ですか？」

「ええ．．．あとの事よろしくお願いしますね」

「かしこまりました」

美月はまるで逃げるように家を出た。

あの写真がこの家のウォークインクローゼットの中にあると思っただけで、恐くなってくる。

賑やかな人込みの中に居る方が気持ちが悪く、横浜元町を散策したり、若い子が多くて賑やかなシアトルスタイルのカフェで時間をつぶしたりした。

だんだん日が影って来て、そろそろ帰らないと思いつつ、気が重たい．．．。

帰宅恐怖症になってしまった。

翔さんには凄く会いたいけれど、あの写真が．．．。

すっかり日も暮れてしまったが、美月は帰りたくても帰れなくなつて、港の見える丘公園のベンチにポツンと腰かけて、夜景を見ていた。

だんだん心細くもなつて来た．．．。

そろそろ翔さんが家に帰って来る時間だ．．．。
そう思ったと同時にぐらいに、携帯が鳴った。

「もしもし．．．」

「美月！！ 今何処にいるんだ？ どうしたの？」
心配して慌てた感じの声で翔が電話をかけてきた。

「今、港の見える丘公園にいます．．．」

「どうしたの？ 今から行くから．．．公園の何処にいるの？」

「氷川丸の近くのベンチに．．．」

「わかった。絶対にそこを離れないで、じっとしてるんだよ」

「はい」

電話を切ってから、なんだか子供に言い聞かせるみたいだなんて思った。

翔さんは私よりも14歳お兄さんなんだっけ．．．。
考えたら、父が亡くなった時と近い年齢なんだ．．．。
心の片隅に、ちょっとお父さんに甘えるような気持ちも時々あった。
愛する夫であり、恋人であり、お兄さんであり、お父さんのような．．．。

お父さんが．．．私は絶対にファザコンだな。

くだらない事をあれこれ思っていたら、翔さんが走ってやって来た。

「美月、一体どうしたんだ？」

「心配かけてごめんなさい。家に帰るのが急に恐くなってしまって．．．帰りたいけれど、帰れなくなってしまって．．．」
さつきまでちよつと冷静にあれこれくだらない事など考えたり余裕があつたが、翔の顔を見た途端、糸が切れたようになってしまつて、うわつと涙が溢れてきた。

「美月！！」

驚いて翔はベンチの隣に座ると、美月をギュツと抱きしめた。

「私．．．私．．．クローゼットの中で栞さんの写真を見つけてしまつて．．．あの時の記憶はないし、祖母も一切あの時のニュースや記事は見せないようにしてくれたから、栞さんの顔は知らないはずなのに、私、知ってるんです。多分あの事故の日に見たんだと．．．」

「あの写真は、美月と結婚する前まで書斎に飾つてあつたものなんだ。」

結婚を機に外してまとめておいて．．．美月が入院して、自分の気持ちに気がついてから、栞への気持ちの整理もついで、栞にはお兄さんがいるから、預かってもらおうと思つていた所だったんだ．．．」

「私．．．恐いんです。栞さんの写真の目を見てみると、恐ろしい事を思い出してしまいそうになつて．．．」。

恐くて．．．恐くて．．．帰りたいけど、帰れない．．．」

「美月．．．もっと気を配つてあげてたら良かったね。悪かったよ」

「あの写真は栞のお兄さんに預けるまでの間、秘書に頼んで社の僕の控室に置いておいてもらうから．．．そうしたら帰れそう？」

「いいのですか？私の為に．．．」

「気にしなくていいんだよ。僕は美月の方が大事だから．．．。ちょっと待ってて、秘書に連絡入れるから．．．」

翔は携帯をとり出して、秘書に連絡を入れた。

「秘書に持って行って貰うまでの間、デートしようか？」

「えっ？」

「夜景も綺麗だし、ここのところ色々あって、ゆっくりデートも出来なかったし．．．まずは美味しいものでも食べに行こう．．．」

「そう言われてみると、お腹がすいてような気がしてきました．．．」

お互いに目と目を見交わして微笑み合った。

あの写真はきつと、思い出が沢山詰まった大切な写真なんですよね？私の為にごめんなさい．．．。いつかあの写真が恐くなくなった時、栞さんのお兄さんから私、返して貰いに行きますから．．．。いつか．．．。

やっぱりこのままじゃいけないんですよね？

逃げてばかりいないで、あの日の記憶を取り戻さなくては．．．そして、立ち向かわなくては．．．。

(第4話に続く)

第4話 栞の兄と暗雲

翔と美月は手を繋いで中華街を歩いていった。

「なんか．．．翔さんの手って魔法の手みたい．．．」

「えっ？」

「高熱を出している時、額に手を当ててくれた時にはヒンヤリと気持ち良くなって．．．」

今は、とっても温かで、それが私の心の中に広がって、心が温まります」

「そうかな？」

ちよっと照れながら、嬉しそうに微笑む翔．．．

「さっきベンチに腰かけながら、あれこれ翔さんの事考えてました」

「気になるな．．．例えば？」

「私の愛する大切な旦那様であり．．．お兄さんであり．．．恋人であり．．．私の心を支えてくれる、心の友のような存在であり．．．」

「あとは？」

「こんな事言っただ怒らないで下さいね。私、9歳の時にお父さんが亡くなりましたよね？ その時のお父さんの年齢が37歳で、翔さんと2つ違いなので、ちよっとお父さんに甘えるような気持ちもある

「って．．．私ちょっとフアザゴンかもしれない」

「うわっ。それはちょっとショックだな．．．年を感じるよ。考えたら美月はまだ21歳なんだよね。若いなあ．．．」

「でも．．．色々頼られて、甘えられて．．．嬉しいです」

「僕をいっぱい頼ってくれよ。沢山甘えても良いからさ」

「嬉しい．．．でも．．．今でも不思議です．．．容姿もスタイルも全然素敵じゃないし．．．何も持っていない私を何故奥さんに迎えようと思って下さったのかなって．．．」

「君と初めて出会った時には、まだ栞の事を引きずっていて、心が何処か遠くにあっただと思う。」

でも、君が家に家政婦として来てくれて、身の回りの事をしてくれて．．．若いのに一生懸命頑張ってくれている姿に心を動かされたし、時々ちよつと抜けてるなと思うところがまた愛嬌があって．．．その飾らない自然体も良いなって思ったし．．．気になり出したらどンドン引き寄せられていってしまったね。毎日君に会うのが楽しくて、ずっと側にいて欲しいって思ったんだ。

側にいてくれるだけで、心が温まると言うかね．．．そんな感じ。

君のお父さんが、あの事故に関わっていた人だと知った時には、こんな偶然があるはずがない．．．故意に近付いてきたのかと思って、凄く裏切られたような、絶望的な気持ちになって、愛情の裏返しで凄く憎しみが生まれてしまって．．．本当に酷い事をしてしまったと、今でも後悔と自責の念に駆られてるんだ。

あんな辛い治療までさせてしまって．．．今でも心が痛むよ。

君が重症の肺炎になってしまって、危なかった時・・・何て言うか、今の自分の本当の気持ちに気がついたって言うか・・・今僕にとっが一番大切に愛している人は美月なんだってはっきりと分かったんだ。

僕の心の中にはもう栞への愛は無くなってしまった・・・そして、美月の事しか見えなくなってしまうてる」

「そんなに思っただえて・・・心が嬉しくて感動して震えています・・・翔さんにありがとっって言いたいです」

「じゃあ僕もありがとっ。この先ずっと一緒に歩いていこう・・・」

「はい」

2人で中華街を歩く・・・。

「私・・・中華街に来るのもはじめてですし、こんな時間に誰かこんな場所を歩くのも初めてです。」

人がいっばいで、賑やかで・・・活気があって・・・楽しいですね」

「そうだったんだ・・・美月は初めての場所が沢山ありそうだね。」

これからは時間のある時は沢山デートしよう」

「ええっ?」

「嫌なのかい?」

「ううん・・・。凄く嬉しい・・・。私・・・祖父母に育ててもらって、祖父母は年金暮らしだったから、あまりお金のかかる場所に

は出かけられなかったし．．．本当に行った事のない場所だらけなんです」

「ようし．．．。じゃあ片っ端から行って．．．美月が行った事のない場所がないぐらいにしよう．．．。それから旅行も沢山行こう!」

「こんなに良くしていただいて、いいんでしょうか？」

「当たり前じゃないか．．．君は僕の妻じゃないか．．．それにその敬語も他人行儀だし、やめようよ」

「はあ．．．じゃあ。出来るだけ、気をつけます」

「遠慮しないで、我が儘言ってごらん」

その言葉に美月は突然涙ぐんだ．．．。

「何か悪い事言ったかな？」

「うっん．．．翔さんの優しさが心に染みて嬉しくて．．．泣いてるの」

「やだな．．．回りからは俺が虐めてるように見えちゃうぞ!」

「うん．．．」

慌てて目をこする美月に翔はとても愛おしさを感じて抱きしめた。

「やだ．．．こんな人込みで．．．皆が見えますよ」

「構わない。美月が凄く愛おしくなって、抱きしめたくなくなってしまったよ」

「か．．．翔さん．．．恥ずかしいです。

あ．．．ほら．．．このお店のお粥美味しそう．．．ここにしませんか？」

「いいよ．．．ここにしようか」

美月は特にお粥を食べたいわけではなかったが、人込みで抱きしめられて、恥ずかしさと、時めく心とで、心臓が口から飛び出しそうになって、気を静める口実が欲しかった。

お粥のお店で食事をしている途中に、秘書から栞の写真は全て家から持ち出したと連絡が入った。

「今。秘書から連絡が入って、もう写真は持って行って貰ったから大丈夫だよ」

「翔さんの大切な人の写真なのに、ごめんなさい．．．」。

私、あの日の事も、栞さんの事も、急には無理だけど、少しずつ負けないように、もっと強くなれるようにしていこうと思います。

あの日の記憶も、思い出せるように頑張ろうと思います、そして、克服出来るようにしようと思います。

その時には、栞さんのお兄さんから写真を返して貰ってください。いえ．．．私が受け取りに行きます。

翔さんの大切な人との思い出の写真ですし．．．」

「だめだよ．．．無理して何かあったらどうするんだ!!」

それに、僕ももう栞から開放されたい気持ちなんだ．．．。
この12年間．．．全く楽しくなかったし、苦しくて辛かったし．．．。

美月と出会ってからの数カ月の方が楽しくて幸せで、最近僕はいつも笑ってる気がするんだ．．．」

「翔さん．．．」

「だから、このままでいいんだ。

今思えば、栞は美しい姿形をしていたが、君のように素直で優しい人じゃなかったし、当時は天真爛漫な所がいいなと思ったが、我が儘で時々ついて行けない所もあったし、多分2人の関係は続かなかったかも知れないと感じるんだ。

亡くなってからは恋しさが募って．．．心が囚われてしまったようになっっていたが、もしかして錯覚のような感じだったのかもしれないと思うようになってね」

「でも．．．」

「もういいんだ．．．」

「はい．．．」

「さあ、もっと食べよう!」

「はい．．．」

翔さん本当に．．．いいのですか？

美月はスッキリしない気持ちだった．．．。

* * * * *

栞の写真を栞の兄に預けて数日してからの事だった．．．。

翔のいない昼間に、栞の兄が訪ねてきた。

兄の方も長身で、女性が放っておかないような、人並外れた矯正なカリスマ的な美しい顔立ちと素晴らしいプロポーションだ。

それに何処か栞に雰囲気似ている．．．。

だが、世の女性が頬を染めて目をハートにさせたとしても、翔に夢中な美月は、ただの来客にしか見えなかった。

それに．．．あの事故の事が心を凍らせてしまっているのか．．．とても冷ややかな雰囲気の人だった。

「初めまして、栞の兄の如月 暁です」

「初めまして、佐倉崎の妻の 美月です」

「あなたが．．．」

「はい？」

「あの事故の犯人の娘なんでしょう？」

「えっ？」

「こう言う事は、すぐに噂になって耳に入りますよ。あの事故からもう12年．．．翔君が新しい人生を送る事もいいと思うし、幸せになって欲しいと願ってる．．．。

だが．．．あの事故の犯人の娘を妻に迎えるなんて．．．」

「翔さんは知らなかったのです。そして私も知りませんでした。それに．．．父は犯人ではありません」

「でも、あの車を運転していた一条さんは、君のお父さんの車がセンターを越えて突っ込んできたって言ってた！！」

「あの時事は全く覚えてません．．．でも．．．」

「覚えてないのに、なんでそう言い切れるんだ？ 君、本当は覚えているけど自分の父親が不利になるからってとぼけてるんじゃないのか？

そして翔君の妻の座にのうのうと収まって、栞の写真をおれに突き返すように翔君をそそのかしたんだろう．．．」

美月は何も答えられなかった。

確かに自分のせいで、翔は栞の兄に写真を渡したのだ．．．。

「栞は．．．美しい俺の自慢のかわいい妹だった栞は、最後は顔が潰れて、醜い姿で逝ってしまったんだ．．．。この悔しさが分かるか？」

「すみません」

「あの時何があっただ．．．教えてくれ．．．」

「すみません。覚えてないんです」

「あの現場に行かないか？ 全く思い出せないのか？」

「時々．．．思い出しそうにもなるのですが．．．頭が痛くなって．

「.」

「あそこに行つて、思い出すように頑張つて貰えないか？」

「わかりました。やってみます」

美月は、栞の兄とあの場所に行く事にした。

(第5話に続く)

第5話 開かれた記憶の小箱（前書き）

事故のシーンの回想などで、グロテスクな表現や血の要素の含む表現が文中含まれます。

苦手な方は十分ご注意ください。

第5話 開かれた記憶の小箱

栞の兄からあの現場に一緒に来て欲しいと言われ、美月は一緒について行く事にした。

勿論とても恐ろしいが、このままにしてはいけないような気持ちがあった。

栞の兄の車で一緒に行く事になって、その車を見たら、30代過ぎぐらいの女性が一人車に乗っていた。

「彼女は栞のマネジャーでもあり、親友でもあり、あの事故の生き証人でもある、一条美和さんだ」

栞の兄が、美月の顔色を確認するように見ながら言った。

「えっ？」

一条美和は、精気の抜けたような青ざめた顔をしていた。

あの日の事を思い出すのは辛い事だと思っし、ましてやあの現場に行くなど辛いに決まってる……。

「はじめまして、一条美和です。」

「はじめまして、佐倉崎美月です。」

「じゃあ行くところか……」

栞の兄 如月は、車のエンジンをかけて、あの現場に向った。

美月の心臓は、現場に近付けば近付くほど、高らかに早く鼓動し、呼吸も速く、息をするのが苦しい気持ちになって来る。

凄く恐ろしいけど、もうあの事件の事に決着をつけたい気持ちにもなっていた。

それに、お父さんを信じたい．．．あの優しく穏やかで真面目で慎重なお父さんが、悪いだなんて信じられない．．．。

* * * * *

現場について、あの自働販売機が置かれている広場の前に車を止めて降りた。

「一条さんにお聞きしたいのですが．．．私は、あの時車に乗ってなかったのでしょうか？」

美月はずっと疑問に思っていた事を美和に聞いてみた。

微かに覚えている自働販売機の事、そして何故自分一人助かったのか？

事故に遭った恐怖の記憶は全く無かった．．．。

もしかして自分は、車に乗ってなかったのではないか？そんな気がしてならなかった。

「えっ？」

その質問に飛び上がるように、脅えるように、美和は反応した。

「私．．．あの時の記憶は殆どありませんが、ここの自働販売機で飲み物を買った記憶があるんです。

お金の散らばる音と、車のブレーキ音も微かに覚えてます」

「一条さん、俺も教えて欲しい．．．。もう一度詳しく．．．。

あの時この子の家族の車は向こうのガードレールを突き破って、落下して大破していたはずだ。この子はなんで．．．。」

「私．．．知らない．．．思い出せない．．．」
真つ青になつてたじろぐ美和．．．。
その動揺する姿が尋常でないように見えた。

「おかしいじゃないか！あの時一条さんが車を運転して、この子の父親が急にセンターラインを越えて激突してきたつて．．．」

「知らない．．．知らない．．．知らない．．．」
耳を塞いでしゃがみ込む美和。

少しパニックの状態のようになり取り乱した様子だった。

かなり取り乱している美和の肩に、美月がそつと手をおいて声をかけた。

「一条さん．．．」

「知らない．．．知らない．．．知らない」

「お願いです。何があつたのか？ 本当の事を教えてください。私．．．逃げません。どんな恐ろしい事だとしても、その真実を受け止めようと思えます。そうじゃないと、前に進めないから．．．」

「一条さん、俺も教えて欲しい．．．。あの時何があつたんだ！！」

「私．．．栞に憧れてて、栞が有名になつていく姿が嬉しかったし、私の自慢だったし．．．これから言う時だったのよ．．．。それなのにあんな事故になつて．．．。私の夢は消えてしまった．．．。」

あなたがここにいなければ．．．あなた達親子がいなければ．．．いなければ良かったのよ！！」

美和はいきなり美月の肩をキツク掴み、振り回すように激しく揺す

った。

「一条さん．．．痛い．．．やめて!!」

急に豹変した美和に、美月は驚きと恐怖心で心がいつぱいになってきた。

「そつよ!!あなた達がいなければ．．．」

いきなり美和に突き飛ばされて、美月はよろけて道路に飛び出し、丁度通りかかったRV車に接触した。

ハツとして青ざめる美和．．．。

「私．．．私．．．何て事を．．．ごめんなさい．．．ごめんなさい」

頭から血を流し、ピクリとも動かずに横たわる美月．．．。

* * * * *

．．．美月は頭を強く打ち、生死の境を何度もさ迷った。

一条美和は、如月が慌てて美月に駆け寄り、救護しようとしている間に、如月の車に飛び乗り逃走した。

車は3日後に、大型スーパールの駐車場で見つかったが。未だに一条美和は見つかっていない。

如月は、あ的一条美和の行動に、もしかしたら、美月の家族はあの事故の被害車で、一条美和の過失による事故だったのではないかと感じ始めていた。

美月は一命をとりとめ、それから少しづつ体も回復したが・・・。

「美月・・・」

翔の方を見た美月は、まるで他人を見る目が変わってしまった。

「おじさん誰？　ここは何処？　お父さんは？お母さんは？お姉ちゃんは？」

「美月！！」

青ざめる翔・・・。

・・・美月は9歳の子供になっていた。

美月の時間は、あの事故の日の翌日に戻ってしまった。

医者の話では、頭を強く打ち怪我した事が原因で、脳に障害が残っているのか？激しいショックで脳が混乱して、9歳の記憶に逆戻りしたのではないかとの事だった。

9歳に戻った美月は、あの事故の記憶を思い出していた。
それは驚く内容だった。

あの日、美月一家は、湘南の海を見にドライブに来ていた。
途中、あの自働販売機の広場の所で車を駐車し、姉と一緒に自働販売機でジュースを買い、車に乗り込んで発進しようとしている所だった。

その直前に、美月が、おつりをとるのを忘れたと言いだし、慌てて車から出て、おつりをとり出し、車に戻ろうとしていた時だった・・・

左前方方向からふらついた運転をする外車が、今度は道路逆走を始め、真直ぐこっちに向ってきていた。

このままではその車と接触してしまうと思い、美月の父は、美月を残し、慌てて避けようとして、車を発進させた。

その直後に激しく車同士激突し、はじき飛ばされて、美月の父母と姉を乗せた車は、ガードレールを突き破り海に転落してしまった。

美月は驚いて、握りしめていたおつりを落とし、コインは道路に散らばった。

そして栞を乗せた車は、大破してスピンしながら自分の方めがけてやって来ていた。

運転していたのは栞だった．．．。

即死状態だったのか？ 血まみれで醜く精気のない顔が．．．その栞の目が、美月の忌まわしい心の記憶のページにはつきりと刻まれた。

その車は美月に軽く接触し、美月は反動でひっくりかえったが、幸い怪我はなかった。

その大破した車の助手席から美和が降りてきて、慌てて栞を車外に引きずり出したが、栞はすでに生き絶えていた。

道路に倒れながら薄れていく記憶の中で、美月はその様子を見ていた。

それから気を失ってしまった。

再び病院で目覚めた時には世界が変わっていた。

栞の父親は大企業の会長、親戚には、大物政治家が揃い、もしかし

たら裏で手を回したのかもしれない・・・。

美月の父は、いつの間にか事故の加害者のような扱いになっていた。それからは、老いた祖父母とヒツソリと暮らしてきた。

* * * * *

1カ月後、美月は退院した。

美月を車に乗せ、病院から自宅である屋敷に向う車の中で、翔は思った。

美月の時間が戻るまで、翔は夫としてではなく、兄の様に、父親のように見守ろうと決心した。

「おじさんは、私を引き取ってくれた人？」

「翔と言ってくれないかな？ 僕達は家族なんだよ・・・。独りぼっちだった美月と家族になったんだ・・・。」

「じゃあ、お義父さん？」

「うーん。ちよつと違うけど、美月が僕の事を思い出すまでずっと側にいて見守るから・・・。」

困った時とか、辛い時とか、悲しい時とか、相談したい事があったら、なんでも僕に話して頼っていいんだよ。分かった？」

「うん」

「そうだな・・・何か欲しいものとか、食べたいものとかある？」

「美月、オレンジシャーベットが食べたいな」

「いいよ。じゃあ家に行く前に、お店に寄って買おうね」

「うん」

まるで初めて乗る車のように、美月は車内をキョロキョロ見回して、ふとバックミラーにぶら下がっているハートの形の小さな写真ホルダーが目が行った。

「この写真誰？」

「この人は僕の大切な人・・・僕の奥さん」

「ふーん。この人は今、何処にいるの？ 家？」

「いいや・・・ちょっと遠い所に旅に出てるんだ・・・ちょっと待っていたら戻って来てくれると思うけど・・・」

「旅行に行ってるんだ・・・早く戻ってくると良いね」

「うん。早く戻って来て欲しいんだけどね」

翔は心の中で、早く記憶が戻って来てくれ・・・と願った。

(第6話に続く)

第6話 戻り始めた記憶と忘れてしまった愛

．．．9歳に戻ってしまった美月と暮らし始めて1週間．．．。

21歳の美月の時は、どことなく壁を作って本当の自分を隠してしまい、自分を押し殺してしまうところがあって、遠慮深く、控え目で自分の主張や我が儘を言わず、一歩下がっているような子だったが、9歳の美月は、好奇心旺盛で生き物好きで、時々いたずらっ子で、自分の心を隠さずストレートに口に出す、とても可愛らしく愛嬌のある子だった。

．．．9歳の頃の美月はこんな子だったんだ．．．。

どちらの美月も愛おしいが、やはり元の美月に戻って欲しい．．．。

どちらの美月にも共通しているのは、優しく思いやりのある素直な人だと言う事だ．．．。

それから働き者と言う所だろうか．．．。

お手伝いが大好きで、お手伝いの吉田さんにくっついて回って、あれこれお手伝いして回る．．．。

吉田さんには、好きなようにやらせるようにと伝えておいた。

日々の生活に楽しみや喜びを与え、一日体を動かす事によって、もしかしたら突然記憶が戻る事もあるかもしれない．．．。

吉田さんが気に入っているのは、母親の像を重ねて甘えているのかもしれない。

なくなつた美月の母親より、吉田さんはずっと年上だが、大らかで穏やかな吉田さんは、もしかしたら美月の母親に似ているのかもし

れない．．。

生き物を飼うのも良い刺激になるかも知れないと、犬を1匹飼い始めた。

ビーグル犬の『サンダー』、稲妻のサンダーではなくて、屋敷に来て早々テラスに置いてあった、翔のサンダルを、ボロボロにかみ砕いてしまったから、美月が「サンダル」からとって「サンダー」にした。

あまり生き物が好きではなかった翔だが、飼ってみるとなかなか可愛らしい．．。

それに、美月が大喜びしてとても嬉しく楽しそうで、そんな様子を見ているのがとても微笑ましかった。

最近美月は鏡に映る自分の姿をジッと見て、リビングのマントルピースの上に飾ってあった、2人の結婚式の時の写真の写真立てを持ち出しては、何度も見比べる事が多くなった。

そしてある日．．。

「翔さん、この写真の人は誰？」

自分の姿にそっくりな写真に疑問を持った美月が聞いてきた。

「これは君だよ」

「私？ この人、翔さんの奥さんじゃないの？」

「これは君なんだ．．」

「翔さんの奥さんは？」

「僕の目の前にいる君なんだよ」

「うそ．．．私結婚なんてしてないよ、美月はまだ9歳だよ」

「美月は交通事故で頭を打って、21歳までの記憶が消えてしまった状態なんだ．．．」

だから、美月の本当の年は21歳なんだよ」

「うそ．．．」

美月はとても混乱しているような顔をして、苦しそうな顔をして、頭を押さえてしゃがみ込んでしまった。

「美月．．．大丈夫か？」

「頭が．．．すごく．．．割れるように痛い．．．」

「病院に行こうか？」

「病院は．．．きらい．．．」

「でもすごく辛そうだよ」

「病院は嫌!」

「じゃあベッドに横になって、暫く休んで様子をみよう。頭痛が治まらなかつたら病院に行くんだよ」

頭痛薬を飲ませベッドに横たわせると、しばらく美月は苦しそう

に丸まっていたが、やがて薬が効いて眠ってしまった。

あの頭痛は、記憶が戻りそうになっている為に起きているものなのか……。それとも……。

* * * * *

その日の夕方の事だった……。

ゆっくりと目覚めた美月は、ムツクリと起き上がって、まだ頭がスツキリしないのかぼんやりとした表情をしていた。

「頭痛は治まった？まだ痛む？」

翔が声をかけると、美月は翔をまじまじと見てから、部屋の回りをクルッと見回した。

「あ……私なんでここにいますか？」

「頭痛を起して、薬を飲んでしばらく眠っていたんだよ」

「いいえ……そうじゃなくて……私……栞さんのお兄さんと一条さんとあの場所にいつて……」

「美月！！ 記憶が戻ったのか？」

嬉しくて翔は美月をギュツと抱きしめた。

「本当に良かった……君は車と接触して、暫く記憶を失ってしまっていたんだ。やっともどったんだね」

「記憶？ 私……全部思い出しました。あの事故の車を運転していたのは一条美和さんじゃない。栞さん……。父は駐車場から出ようとしていて事故に巻き込まれただけ……」

「9歳の記憶に戻ってしまった時の美月が教えてくれたよ．．．。どうして一条さんは自分が運転したなんて嘘を．．．」

ギョツと抱きしめてる翔の手を降りはらって、美月は翔の腕の中からすり抜けた。

「あの日の記憶を思い出しましたから．．．もう．．．酷い事はしないで下さい．．．。」

父は悪くない．．．だから、もう父も私の事も恨まないで．．．」

翔はハツとした。

もしかして．．．記憶を無理矢理呼び戻そうとして、辛い目にあわせたあの時の状態の記憶でストップしてるのか？

「一緒に中華街に行った事は覚えてる？」

「そんな所．．．行ってませんよ。私が、思い出せないから、栞さんのお兄さんを家に呼んで、私をあの場所に連れて行って、怒った美和さんが私を突き飛ばして．．．」

翔は衝撃を受けた．．．。

どうして肝心の記憶の部分を忘れているのだろうか．．．。美月を辛い目にあわせた罰を今、受けているのだろうか．．．。

「僕達はあの後仲直りしたんだよ。僕の愛してるのは栞じゃなくて君なんだよ」

「栞さん言ったじゃありませんか．．．唯一愛した女性が栞さんだと．．．。」

仇の娘だから、亡くなった父の代わりに一生罪を償わせるって！
でも．．．父は悪くありません．．．酷いのは栞さんじゃないです
か！！ だから．．．もう私を苦しめるのはやめて下さい。私と別
れてください．．．もう別れましょう．．．。
翔さんは私を愛して結婚したんじゃないから．．．」

「美月！！違う．．．違うんだ．．．。
僕の愛してるのは美月．．．君なんだよ」

「わ．．．私．．．もう．．．嫌いになりました．．．。翔さんの
事嫌いになりました」

「美月！！君はまだ混乱してるんだ。あの後、僕達は仲直りして、
過去の事は忘れて一緒に生きていこうって誓い合ったんだよ」

「そんな事知りません！！」

翔はショックを受けていた。
やっと自分の元に戻って来てくれた美月は、心を置き忘れてきてし
まった．．．。
そして、自分のとった軽率な行動が、美月の心を深く傷つけて、心
の奥底の記憶に深く刻んでしまっていたんだ。

「と．．．とにかく．．．美月はまだ思い出してない所があるから
．．．落ち着いて．．．。
僕と別れるだなんてそんな悲しいことを言わないで欲しい．．．」

「．．．．．。」

心を通わせ合い、一緒に歩いていこうと誓い合った美月でもなけれ

ば、9歳の天真らんまん美月でもない．．．心の扉を固く閉じて、翔との間に大きな壁を立ててしまつて遠い目で自分を見つめてる、目の前にいても心は遠い場所にある美月が目の前にいた。

こつなつてしまつたのは、自分の犯した過ちのせいかもしれない．．．
ならばもう一度、美月の心を取り戻すように、取り戻せるように．．．
初めからやり直そう．．．。

辛く苦しい気持ちの中で、翔は自分に誓つた。

「別れてくれないのなら．．．私．．．翔さんの事恨みます」

「悲しいけれど、いつぱい恨んでくれてもいいよ、それでもいいから、僕は君と離れたくない。

君が事故に遭う前まで、僕達は愛し合つて、笑い合つて、心を通い合わせていたんだ．．．。

君が思い出すまで．．．全部を思い出すまで、別れないよ。別れないよ．．．」

大切な記憶の一部分が欠落して、翔に結界をひいている美月は、抱きしめる事は勿論出来ないし、近付いたり、触れようとするだけで嫌がり、寝室も別室．．．。

そう．．．あの時、自分が美月にしてしまつた仕打ちがそのまま自分に跳ね返つて来た様だつた．．．。
話しかけてもたいした返事もなく、ろくに会話も出来ない状態だつた。

こんなに辛く苦しい事だつたなんて．．．。
でも絶体に諦めないし、美月を手放したりはしない．．．。

美月は病気なんだ．．．何処かに心を置き去りにしてきてしまったるんだ。

心が通じ合い愛し合い、前を向いて2人で生きて行こうと誓ったあの時間を励みにして．．．心の糧にして．．．。

精一杯の誠意と愛情を美月に注いで．．．いつか起き忘れた心が見つかると．．．凍ってしまった美月の心が解けて振り向いてくれるように．．．。

そんなある日の事だった．．．。

逃走して行方不明だった一条美和が見つかった。

新宿の歓楽街の中にある風俗店で働いていた。

丁度その店について密告電話があり、警察のがさ入れが行なわれ、美和が偶然見つかった。

テレビに映った美和の顔は、すっかり生活に疲れきってしまった様子で、随分と老け込んでしまっていた。

取り調べで、あの日の真実も、美月を手にかけてようとした事も、いずれ全て分かるだろう．．．。

(第7話に続く)

第7話 前を向いて歩いていこうよ（前書き）

事故のシーンの回想などで、グロテスクな表現や血の要素の含む表現が文中含まれます。

苦手な方は十分ご注意ください。

第7話 前を向いて歩いていこうよ

- - - 警察につかまってからの美和は観念したのか、全てを打ち明けてくれた。

あの日、運転していたのはやはり栞だった。。。

万が一の事もあるから絶体に運転はさせないように、栞のマネージヤードだった一条美和は、所属事務所からキツク言われていた。

だから、いつも一条美和が運転して、栞が後部座席に座る事が日常だったが、あの日、一条美和は風邪をひいて38度の熱を出している状況だったため、栞が運転を代わり、美和は助手席に座った。

栞もちょっと風邪気味だった為、薬を飲もうとしたが、いつも飲んでいる薬を切らしてしまった為、近くの薬局で初めて飲む薬を購入。。。

その薬を飲んで暫くは何事もなかったが、あの事故現場の少し手前辺りから激しい睡魔が襲ってきて、意識も朦朧とし始め、ついに道路を逆走、初めあの自働販売機の方に車は真直ぐ突っ込みそうに向っていたが、美和が気がつき慌てて急ハンドルを切ったが間に合わず、美月一家の車と激突した。

半パニック状態の美和は、自分が運転を代わって貰って、しかも、薬を飲んでいた栞が起した事故だと知られるのを恐れ、自分が運転していた事にした。

確かに急ハンドルを切ったのは美和だ。。。

更に事故現場が凄惨な状況で、どちらの過失かの判別がつきにくい事を利用し、美月が記憶喪失だと言う事や9歳の子供の言う事の信

びょう性なども利用し、また、美月の父の過失と言う事を主張し、更に、栞の父親と親戚の権力を使い、美月の父の方が非が大きいと言う事にしてしまった。

まさか、12年後になってから急に、美月の記憶が戻るとは思いもよらなかった。

だが、美月の父親の過失ということにして、何も思わなかった訳ではなく、ずっと精神的に苦しんできた。

あの事故現場に置かれていたお地蔵と花は美和が置いたものだった。心の中ではずっと謝り続けて来たのだった。。。

風化されそうになっていたあの事故の事が、急にクローズアップされ、あの時加害者扱いされていた一家が事故に巻き込まれた被害者だった事が大きく記事にされた。

翔と美月の事は何とか食い止めて、記事にはされなかった。。。せめてものお詫びと、栞の父と親戚が報道やマスコミ関係に、手を回したからだ。

* * * * *

あれから美月は頻繁に偏頭痛を起し、床に伏せる事が多くなった。病院につれていこうとしても、とても嫌がり、時々薬で眠らしては、知り合いの医者に往診に来て貰い様子を診てもらう事が多かった。

ほんの少し進歩もみられた。

床に伏せている時に、手を握ったり、優しく髪の毛を手で撫でても嫌がらなくなつた。。。

何かを思い出そうとしてるのだろうか・・・。

眠りから覚めて起き上がった美月に翔が優しく声をかけた。

「頭痛はとれた？」

コックリとうなづく美月・・・。

「お腹が空かないか？ 久しぶりに中華街にでも一緒に出かけないか？」

美月は覚えてないかもしれないけれど、一緒に行った事があるんだよ」

「覚えてません・・・」

「行ってみないかい？ たまには外の空気を吸うのも良いし」

「わかりました」

美月の手を繋いで歩き始めたら、手を振り払われて拒否されたが、翔は諦めずに、さりげなくまた手を繋いで歩き始めた。

初めに氷川丸の前のベンチに座らせて、カップのオレンジシャーベツトを手渡した。

「これは？・・・」

「9歳の状態の美月が好きだって教えてくれたんだ」

「やだ・・・恥ずかしい・・・」

「他にも好きなものを色々教えてくれたよ。それから一緒に色々な場所にも出かけたんだよ。動物園とか水族館とか・・・」

「なんとなく覚えてるような・・・」

「それから・・・前にこのベンチと一緒に腰かけて、夜景を見たんだ、記憶を無くす前に・・・」

「えっ？」

「なかなか家に帰って来なくて、心配して電話したら、「このベンチにいるって言うから、慌てて飛んできた」

「全然覚えてない・・・」

「その後に中華街に行ったんだ。行ってみようか」

手を繋いで中華街の街を歩く・・・。

「すごい人がいっぱい・・・」

「前にもそんな事言ってたよ・・・」

「えっ？」

また歩き始めようとした時だった・・・。
突然美月が立ち止まった。

「『翔さんの手って魔法みたい』って私・・・言った事ありますか？」

「ああ．．．この辺りでそんな事話していたなあ．．．」

「私．．．少し思い出しました。お粥を食べた事も．．．」

「本当!?!」

「まだ、全部は思い出せないけれど．．．2人とも笑ってましたよね?」

「そうだよ．．．僕のせいで美月の心を傷つけてしまった事もあったけれど、あの後、僕達は信頼し合って、愛し合って．．．すごく仲良くなったんだよ。」

そしてこの先ずっと一緒に歩いていこうって誓い合ったんだ」

「ちょっとだけ、思い出しました。まだ全部じゃないけれど．．．それに翔さんはずっと優しくかったです．．．。」

どんなに避けようとしても、撥ねつけようとしても．．．私に真直ぐ向ってきて．．．翔さんの話した事は、本当の事なんです。私達．．．とっても仲良かったのですね」

「そうだよ。僕達は愛し合ってたんだよ、そして今も君の事を深く愛してる．．．。」

「やだ．．．恥ずかしくすぎます。こんな場所で．．．。お粥でも食べませんか? あ．．．。」

「前も全く同じ事を美月が言ってたな．．．。あれはお粥が食べたかったんじゃないかって、照れ隠しだったのかな?」

「恥ずかしい．．．」

「この店に入ったんだよ。行ってみようか？」

．．．ゆっくりゆっくりと、止まっていた2人の歯車が回り始める
．．．。

「ねえ．．．僕の事、少しは嫌いじゃなくなってきたかな？」

「ええ．．．。もう嫌いじゃありません」

「じゃあ、好きになってきてくれた？」

「はい．．．」

「良かった」

* * * * *

．．．その日の夜．．．久し振りに一緒に寝室で．．．。

「僕達、すごく愛し合っていたのに．．．淋しかったよ。」

9歳の記憶に戻ってしまった美月と一緒に寝るわけにも行かないし
．．．その後はすごく嫌われてしまったし．．．。本当に淋しかった
なあ．．．」

「でも．．．私．．．まだ全部思い出したわけじゃあ．．．」

「初めての夜の事は覚えてる？」

「あまり……」

「じゃあ……愛し合った夜の事は？」

「あまり……」

「じゃあ今夜の事を忘れずに覚えてて欲しい……」

「全然覚えてないから……ちょっと……恐いです」

「嫌かい？」

美月はふるふると首を横にふった。

「君を抱きしめても良い？」

はにかみながらコックリとうなづく美月……。

……寂しがり屋の美月……君の一番欲しいものを僕は知っている。

君は独りぼっちじゃないし、僕は君の家族だし、君の帰る家はここだよ。

僕は絶体に君の手を離さないよ……。

淋しい時は僕が優しく抱きしめて、君の心を温めてあげる。

悲しい時は、一緒に泣いてあげるし、君の悲しみを僕の愛で取り除いて包み込むよ。

楽しい事や幸せは、2人で分かち合って、2倍楽しもう……。

ずっと ずっと . . . 2人で、一緒に歩いていこう . . .

* * * * *

. . .その後、美月は悪夢を見なくなり、楽しい夢を見るようになった。

ふと目が覚めて、自分の腕の中で眠る美月を見れば、柔らかな優しい寝顔で、軽やかな寝息を立てて眠っていて、愛おしく嬉しくて、翔は微笑む . . .。

これから作る2人の未来 . . .。
翔の心の中は、希望に満ちあふれていた . . .。

美月の一番欲しいものと、自分の一番欲しいものは同じだったのかもしれない . . .。

孤独な12年の年月 . . .。

暗い夜 . . .ふと温かな家庭の家から漏れる明かりと幸せそうな笑い声 . . .。

あの時は、絶体に手に入らないものだと思っていたが . . .。

この幸せをもう失わないように、大切に育んでいこう . . .。
この愛する人と一緒に . . .。

- - - 終 - - -

第7話 前を向いて歩いていこうよ（後書き）

ちょっとサスペンス調ラブストーリーで、重苦しい内容ではありませんが、エンディングは温かな雰囲気ですとめました。

最後まで読んで下さり、ありがとうございました。（^^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5944t/>

SWEET HOME

2011年6月2日00時16分発行